



妻の妊娠

井口昭久

Tさんはマージャンと酒が好きだった。酒を飲まないと言ったときも時折酒の匂いがした。私の外来に来たときも時折酒の匂いがした。A型肝炎でもB型肝炎でもなかったが肝臓が悪かった。飲酒による肝臓障害であると私は思っていた。

「少しぐらい酒を飲んでもいいでしょう」と、すがりつくように言う彼に、禁酒を言い渡した。禁じられて飲むよりは、許されて飲みたかったのだろう。酒を飲み続けて50歳代で亡くなった。30年前のことである。

その頃、肝臓の障害の原因の多くは飲酒によるものと思われていた。

ことが分かった。酒を大量に飲む人は高く出る。私はγ-GTPが高い人に限って酒を控えるように勧めてきた。

しかし現在では、NASHという病気の存在が明らかになり、酒を飲まなくてもγ-GTPが高く、脂肪肝になる例が報告されるようになった。

昨日の常識は今日の真実ではない。医学研究の成果が、実際の医療現場に应用される速度が速くなってきた。

昔はインフルエンザの予防接種をした日には、お風呂に入ってはいけないが、現在では風呂に入っている。酒を飲んでも構わない。

インフルエンザの予防接種の季節である。大学の職員や学生が集団で接種する。私は予防接種をしてはいけない人を見分ける係であった。希望者が多いので、予め書いてきた質問票をみながら、顔も見ずに「卵を食べてもアレルギーは出ませんか？」などと下を向い

1980年代になると、肝臓障害の原因が多岐にわたることが明らかになっていった。C型肝炎の存在が明らかになり、D、E型肝炎のウイルスが発見された。それまで飲酒が原因であると言われていた患者は医者から濡れ衣を着せられていたことが分かった。Tさんの肝臓障害は酒が原因であった可能性は少ない。禁酒なんかしなくてもよかったのかも知れなかった。彼には思う存分酒を飲ませて死なせてやらなければいけないかった。

2000年代になると、γ-GTPという検査法が普及した。この酵素の血液中の濃度が高い人はアルコールによる肝臓障害である



たまま確かめた。

「妊娠していませんか？」という項目がある。「してません」と怒ったように答える女子学生や、戸惑って「たぶん」と言う女子学生もいた。

下を向いたまま「妊娠していないよね？」と聞くと、「たぶんしてないと思います」と答える男の声がした。「どうして多分？」と顔をあげて聞くと、男の人は言った。「女房のことではないんですか？」

今後、医学が進歩しても「妻の妊娠が夫の予防接種に影響を与える」という研究結果は得られないと思うが、自信はない。

井口昭久 1943年長野県生まれ。名古屋大学医学部卒業後、同第三内科入局。愛知医科大学講師などを経て'78年ニューヨーク医科大学留学。'93年名古屋大学医学部老年科教授。名古屋大学医学部附属病院長を経て現在、愛知淑徳大学教授、名古屋大学名誉教授。『鈍行列車に乗って一医者人生ソロソロ帰り道』(風媒社)など著書多数。